

黎明期のセーフティプロモーション（SP）活動に見られる住民間の 目的意識形成の成因解明 Part I

山田典子¹⁾、川内規会¹⁾、山田真司¹⁾、新井山洋子²⁾、上野雅³⁾、
富田恵¹⁾、リボウィッツよし子¹⁾

- 1) 青森県立保健大学
- 2) 十和田市役所
- 3) 介護老人保健施設とわだ

Understanding the Foundation of the Decision-Making Process in the First Stages of Safety Promotion Activities.

Noriko YAMADA¹⁾, Kie KAWAUCHI¹⁾, Masashi YAMADA¹⁾,
Yoko NIIYAMA²⁾, Masashi UENO³⁾, Megumi TOMITA¹⁾, Yoshiko LEIBOWITZ¹⁾

- 1) Aomori University Health and Welfare
- 2) Towada Municipal Health sector
- 3) Towada Nursing Home

要約

地域住民活動に見られる住民間の目的意識形成過程の成因について、B市の取り組みをもとに、外傷予防における地域住民の合意形成と参加の促進のための条件を明らかにすることを目的とした。半構造化面接法を用い11名から聴取し、SP活動に取り組む組織に参与観察者として介入した。

地域住民活動に見られる住民間のSP活動参加への目的意識は、C会活動メンバー（以下、会員）がSP活動に参加し、様々な知識を得ることで認識が変化し、会員の具体的な行動化へと「つながり」、関係者との「連携」が形成されていた。これをSP活動の目的意識形成過程と判断した。

会員の合意形成と参加が促進される条件は、従来より保健活動で保健師が面識のある集団に働きかけ、健康教育等を媒体に「住民への介入と支援」、および「人材育成」に取り組んできた活動の蓄積から、関係者との「つながり」や「連携」が深められると推察された。

キーワード：目的意識形成、地区住民活動、構築過程、社会支援システム、セーフティプロモーション

Abstract

The aim of this study is to identify how citizens form objectives in relation to community activities. Between 2007 and 2008, semi-structured interviews were conducted with 11 members of C association, which is a local citizens' group in B city.

The results indicate that members recognized that gaining a high level of knowledge regarding safety promotion during the decision-making process changes citizens' level of consciousness regarding safety promotion. This acknowledgment led members to change their motivation and behavior in relation to "teamwork" and "inter-personal relations" with other staff members.

It is thought that the creation of trained personnel is needed in order to more easily gain citizens' understanding of safety promotion. Furthermore, extra information concerning health education needs to be provided to currently active groups so that these groups can more successfully promote the participation of other citizens.

Key Words : Decision-Making Process, Community Activities, Construction Process, Social Support System, Safety Promotion.

I 緒言

人々の暮らしの基盤であり、クオリティ・オブ・ライフの主要因でもある安全や健康に対して、さらにその質や

優先順位を高めることが求められている。

反町¹⁾は「セーフティプロモーションとは、事故、暴力、自傷行為などによる外傷やそれに対する脅威を、住民参加を伴う部門や職種をこえた協働により予防する取

り組みであり、科学的に有効な活動と評価しうるものをいう。広い意味での公衆衛生アプローチによる取り組みである」と述べている。つまりセーフティプロモーションとは、地域に暮らすあらゆる年代の人々や、その人々を取り巻く環境を介入の対象とし、事故や傷害の防止、犯罪の防止、自殺の防止等を含む幅広い範囲を取り上げ、課題解決に有効であると示されたプログラムを生活の場において組織的に実践することを目的とする住民活動である。

筆者らは、かねてより「ドメスティック・バイオレンス（以下、DV）被害者の支援における早期介入と看護職の役割」について研究し、DVや虐待のような処遇困難事例の解決には、支援者同士のネットワークづくりと、地域生活支援に向けた関係職種間連携モデルの構築が必要であると考えてきた。さらに、日本公衆衛生協会の研究「市町村におけるSafety Promotion(以下、SP)のモデル事業化―(分担代表、大西基喜)―」では、普及啓発活動を通して、多分野・多職種による外傷予防の必要性を認識した。その結果、平成17年度より、A県B市に介入し、市町村支援のためのSP普及啓発・事業化支援用ツールの開発やSPの施策化を目指す活動を行ってきた。

公衆衛生における外傷の問題は、DVを例にとると、被害者の4人に3人は医療機関を受診しているのにもかかわらず、そのケアは個々の医療スタッフの裁量にゆだねられ、被害の実態や疫学データを持たないばかりか、警察や福祉との連携もほとんどなされてこなかった²⁾。このように外傷に対する予防は、縦割りシステムの中で、長い間置き去りにされてきた健康上の課題であるといえる。

1989年に発足したWHOコミュニティ・セーフティ・プロモーション協働センター（WHO Collaborating Centre on Community Safety Promotion）は、外傷予防の地域システムを持つコミュニティに対し、近年、セーフコミュニティ（以下、SC）の認証を行っている。2009年1月現在、世界では150以上のSCが認証されているが、残念ながら日本における認証地域はまだひとつしかない。筆者らは、SP活動の推進、SC認証に向けた取り組み、外傷予防の発生を的確に把握するためのサーベイランスの確立などを行うためには継続的な住民参加が必要であり、そのための重要な鍵は地域住民の合意形成と主体的参加であると考えている。合意形成は個人が地域住民に対して繰り返し説明や依頼を行い、住民間の意思を統一させることで達成できる。しかし、住民に主体的な参加意識がなければ継続的な参加を得ることは難しい。主体的参加を実現するためには、住民の中に目的意識―自らの行為の目的についてのはっきりとした自覚―を醸成し

なければならないであろう。

本稿では地域住民活動に見られる住民間の目的意識形成の成因について、B市の取り組みをもとに明らかにし、外傷予防における地域住民の主体的参加意識を醸成するためにはどのような働きかけが有効であるかを探った。併せて、その働きかけが地域特性に由来するものかどうかについても検討を行った。

II 研究方法

本研究課題である、地域住民活動に見られる住民間の目的意識形成の成因解明のためには、質・量の両面からの評価が必要である。全過程としてはトライアングレーションによる研究手法を用いる。トライアングレーションとは、複数の研究手法やデータを用い、実践が重視される分野で活用されることが多く、「マルチメソッド」と表記する場合もある。観察やインタビューといった、量的研究では軽視されがちだったデータ収集方法を用いた質的研究手法である³⁾。今回は、質的研究に重点をおき、「意識」の形成について明らかにするため、以下の方法で取り組んだ。

期間：平成19年8月～20年3月

研究デザイン：半構造化面接法を用いた面接調査、および、研究者が研究対象になる集団・地域社会の中に入り込み、時間と場を対象者と共有し、内部から観察し研究テーマを明らかにする「参与観察」の手法を用いる。

内容：インタビューの内容は、地域住民活動に参加したきっかけ、まちへの思い、活動をとおして得られたこと、課題と感じていること等である。

研究対象者：セーフコミュニティの実現を目指すC会活動メンバー（以下、「会員」と略）11名。

データ収集場所は、プライバシーが保護できる静かな場所で、かつ、協力者(会員)の希望する場所（例、保健センターの個別面接室、自宅等）とする。

倫理的配慮：研究対象者の募集・選択における任意性の確保のため、対象集団の基幹組織(行政：保健セクター)から研究の許可を得たのち、研究者より会員に口頭と書面にて研究の概要と研究協力者の権利を説明した。公募で協力を募り、後日個別に連絡し、訪問の同意が得られた会員に、具体的な日時の予約をすることを伝えた。

介入において予測される対象者の不利益とそれを回避するため、自宅もしくは個人が希望する場で調査し、面接中に研究協力者のプライバシーが侵害されるリスクの低減を図った。特定の集団への聞き取りであるため、言葉のなまりから発言者が特定されることのないように、データ加工をする。予測される不利益を回避するため、

答えたくない質問は回避してもよく、データ整理後、本人の確認を取り、採用不可のデータは取り除く。本件は、青森県立保健大学倫理委員会の承認を得て実施した。

用語の定義：黎明期とは、「夜明け」を意味し、本文においてC会の結成までの準備期間と、結成後半年ぐらいの期間と定義する。

SP/SC活動とは、事故、暴力、自傷行為などによる外傷に対する、住民参加を伴う部門や職種をこえた協働により予防する取り組み(SP)と、このSP活動を基盤に生活の場において組織的に実践するコミュニティ(SC)と定義する。

B市の概要

B市は北東北に位置する中都市であり、高齢化率が高く過疎化が進みつつある。医療過疎も住民生活を圧迫していて、住民の不安は根強い。その一方で、住民の郷土愛には強いものがある。住民によるB市の描写を示す。「町全体がフラットで妊婦や高齢者も比較的暮らしやすい町、自然が素晴らしい。」「商店街が寂しい(シャッター商店街)、町全体がおとなしい、農村部での生活は近隣に商店や病院がないため、外出には自動車が必要。」「公共交通機関の便が少なく、路線バスは、徐々に縮小されてきている。」「運転のできない高齢者はタクシーを利用するしかない。」

人口は2008年3月現在で、約6万6千人(男性は、約3万2千人。女性は約3万4千人)。世帯数は約2万7千世帯である。また、2007年の統計によると、出生率7.2、粗死亡率9.7、高齢化率22.4%と、高齢者の割合が高い。B市における外因死亡率の傾向は、2004年から2007年にかけての人口10万対外因死亡率の状況は、2004年は死亡率102.9、外因死は12.3、2007年には死亡率79.2、外因死は8.0と年々減少している。

外因死亡率を年代別にみると、2007年では65歳以上の高齢者の死亡率が一番高く、次いで45～64歳が高くなっている。また、0～9歳、10～19歳が最も低くなっている。死亡件数で一番多いのは、自殺27件、2番目は自動車事故の15件(歩行中の事故が7件、車による自損5件等)、その年代背景は60歳代以上の高齢者となっている。3番目は誤嚥、誤飲の8件、その年代背景は50歳代、60歳代である。4番目に多いものとして、農作業中のトラクター等の下敷きによる死亡事故4件等となっている。

III 研究結果

1. 回答者の概要

SCとして認証を受けたコミュニティは、犯罪の阻止・抑制のみならず、社会的信頼関係を創造するまちとして、

世界的に注目を集めている。日本では、京都府の亀岡市が2008年3月SC認証を得ている。今回介入するB市は4年以上の歳月をかけて、地域住民活動から掘り起こし、ボトムアップ型の政策策定と、社会支援システムの構築がすすめられている点が特徴である。

対象者は概ね平成18年度のSP研修や定例会議からの参加者で、SP/SC活動に取り組み始め1～2年弱の会員で、30歳代2名、40歳代2名、50歳代2名、60歳代5名、性別は男性1名、女性10名、の合計11名より協力を得た。インタビューの場は、自宅、職場、保健センター等であった。インタビューに要した時間は1人平均40分であった。

また、同一の対象者に対し参与観察も行った。その方法は、毎月の定例会の様子や各種活動参加時の言動をフィールドノーツに綴った。

2. 面接調査の結果

1) SP/SC活動参加のきっかけ

SPに興味を持ち、活動に参加のきっかけとなった理由は、①「参加者の個人的な地域活動に対する興味」、②「今まで住民活動に何らかの形で参加してきた」、③「今までの仕事との関連」、④「保健センターの職員に勧められた」、⑤「新たな取り組みへの意欲」の5項目に分類できた。これを表1に示した。

2) SC活動開始初期の「やりがい」

SP/SC活動に取り組んだ対象者が、活動開始初期に感じた手ごたえ及びやりがいは、①「新しい知識の取得」、②「意思表示の重要性」、③「連携・人とのつながりの重要性」、④「まちづくりに関する視点の変化」、⑤「自分から行動してより良い環境を作る」の5項目に分類できた。これを表2に示した。

3) 黎明期の組織活動で参加者が認識した役割

SP/SCの活動に関わり始めた対象者が、活動初期において自らの活動や役割についての自己認識は9項目に分類できた。これを表3に示した。

4) 黎明期に認識されたSP/SC活動の課題

黎明期に認識された課題は9項目に分類できた。これを表4に示した。

3. 参与観察の結果 ～SP/SC活動に関わった住民の感想より得た目的意識形成状況～

Aさん：「自分達が日ごろ取り組んでいることって、やっているときはどうすすめるかで精一杯。だけど、この前みたいに、紙芝居やプレゼンをして、取り組みをまとめ発表したら、“あ～、こんなすごいことやってたんだ！、こんなふうに見られていたんだ……”って、気づけた。……大変だったけど、やってよかった」

表1 SP/SC活動の参加のきっかけと目的意識

	カテゴリー	サブカテゴリー
SCに参加したきっかけ	住民活動に何らかの形で参加してきた	精神保健が好きなので、自殺予防が入っていたことが参加のきっかけ 自主活動の「オアシス」も役に立つ活動だと思い、自分の経験も役に立つかという思いもあった 20年くらい前からネットワークTowでボランティアをしていたのがきっかけで、興味を持った
	今までの仕事との関連	自殺予防は保健所に勤務していた頃最初に手がけていた事業だから思い入れがある 老健施設職員として働いており、高齢者に必要なものを考えていこうと思った 以前、家庭相談をしていてSCとわだを実現させる会にも同様の分野があるのでと思った。 以前からの活動で連携がなく縦割りであると感じており、連携の大切さを知ったから
	保健セクターの職員に勧められた	住宅改修についての講演などの活動を行っており、保健所と交流があった時に会のことを教えてもらった 健康推進課の課長に勧められた 保健所長からSCとわだを実現させる会の話聞いて共感した
	新たな取り組みへの意欲	部門横断的取り組みへのチャレンジ 自分自身の気づきを一人一人へつなげていく いろいろな領域の人が手をつなぐということへの関心 SC「T会」の考え方に部門横断的という考えがある
	参加者の個人的な地域活動に対する興味	漠然と十和田のために何かしたいという思いがあった 退職して打ち込めるものが欲しかった 住民に情報の提供をするために勉強したいという思いがあった

表2 対象者のやりがいと手ごたえ

	カテゴリー	サブカテゴリー
やりがいや手ごたえ	新しい知識の取得	市がどのような事業をしているかなどを知ることができた アンケートによって他職種の方でも自分と同じ思いの方がたくさんいることを知った 色々な知識を得られた いい刺激を受けた 「十和田のために何かしたい」と思っている若者が居ることを知ることができた
	意思表示の重要性	SCのテーマは身近なことであり、市民の立場での発言の大切さを知った 「こうしてほしい」と思ってもなかなか言えないが、まとまるとすごい力になる 言うが変わるといふこともあるということがわかった
	連携・人とのつながりの重要性	人との出会いを通して輪が広がり、横のつながりができた アンケートなどを通して強いつながりを得ることができた 連携・コミュニケーションの大切さわかった 協働の大切さを知った 1人では生きていけない 人とのつながりを求める人が集まってくる 会の発足当初より確実に広がってきている 自分の仕事にもつながった
	まちづくりに関する視点の変化	環境への視点に対して意識が高まった 他職種の考えや生の声を聞いて新しい視点を知ることができた
	自分から行動してより良い環境を作る	自ら行動する 待ってもダメ 動かぬとダメ 良くしたいと思う気持ち 自分をその環境に適合させるのではなく、自分から環境を変えていくという視点を持つ 何でもやってみるべき

表3 自分達の活動と役割と目的意識

	カテゴリー	サブカテゴリー
自分達の活動と役割	スーパーバイズ機能	行政はアドバイザーとして相談を受けたりする
	個人レベルでの意識向上	救急車が来れば車で見に行ったりなど、気をつけて地域を見ている
	人材育成	月に一度SCとわだについてみんなで集まって話し合い SCとわだを実現させる会の普及・啓発活動を行う 定例で集まって自殺予防サポートの視点について討論する 研修会に行って知識を新しいものにする SCの学会への参加 保育に関わっている人の参加の働きかけを考えている
	個々の住民の介入と支援	老人クラブなどに参加していない高齢者に友達や趣味を持たせることが大切 独居高齢者は詐欺に遭いやすいので注意したりクーリングオフの手続きをしたりする
	行政・民間・作業所・教育の協働	高齢者に学童期の児童の登下校時間の散歩を勧める 作業所に行ってサポートをする 転倒予防に関する取り組みをしている 保育士に協力してもらい幼児期のヘルメット着用を働きかける
	SCのシステムづくり	地図をつくてネットワーク作りをしたり、緊急連絡先カードを作って連絡体制の整備をする 心の触れ合いサロンで専門職として相談を受けたり団体に対してアイデアや定例会の後押し・講義をする
	調査による現状把握	乳幼児期の家庭内事故アンケートの実施 転倒予防に関するアンケートを、在介センターの協力を得て実施 在介センターの職員に頼み、高齢者の方々にアンケート調査を実施
	目的を明確にし、PDCAサイクル	「何のための活動なのか」という活動の目的を伝える 目的を達成するために自分たちで仕掛けを考える アンケートの集計結果などを地域住民に返していく
	地域のコミュニティづくりをしていく	最近是人と人のつながりが希薄化している ご近所と顔が見える、暮らしやすい地域・コミュニティをつくりたい

表4 黎明期に認識された課題

	カテゴリー	サブカテゴリー
黎明期に認識された課題	当事者に問題意識がない	みんなが集まる場所に出てこない人に関して問題を抱えている 集まりに出てこない人どう働きかけるか 老人クラブなど何も参加せずに引きこもっている人をいかにみんなのところにもっていくか
	SCとわだの概念が住民に十分理解されていない	SCとわだを実現させる会の趣旨や行っていることを具体的に示すのは難しい SCとわだに関する一般住民の認知度が低く無関心である
	SCとわだに住民を巻き込み興味関心を引き出す	活動を進め結果を住民に示し、感心を得る どのような形で住民を参加させるか考える 住民の参画を促す
	連携の必要性はわかっているがもともとつながりが少ない	関係機関、関連職種とのつながりが少ない 他機関、他職種とのつながりが少ない
	世代・職場・地域におけるつながりの希薄化	地域住民同士のつながり、コミュニケーションの不足 地域で活動する人々間のつながりを作っていくこと 町の方では職場の人間関係が大きくて地域の人間関係が薄い 地域の活動をしているのは高齢者ばかり 若い人の地域のつながりが少ない
	気軽に相談できる場がない	行政ではなく相談しにいける場と対応できる人を育てたい 自分の苦しみや不安をゆっくり自分で分析し自分を認められる場所ができるよう努力すること
	対象の年代にあわせた自殺予防プログラムの開発や介入視点の明確化	自殺予防の関わり方・視点を考える 今の若い人にはインターネットを利用した相談体制ができればよい 自殺予防にどういった視点で関わっていくか考える
	対象の実生活に則した経済的で具体的な働きかけ	転倒の原因は不注意や体力の衰えだと思っている。住民に環境作りが大切であるという意識を持たせる 環境に注意することで住宅改修等お金をかけなくても予防ができることを伝えていきたい 電化製品のコードを束ねるなど、お金のかからない予防法を指導する
	調査からプログラム作成へ評価の見通しが立たない	プログラムを立てる 分析を進めよいプログラムを考えることが課題

Bさん：これまで一緒に学習し取り組んだ同士で必要性の再確認とみんなで取り組んでいるという確認が出来たとき「一人でない」という事が実感できた。

Cさん：(作業部会で話し合いをして)実施していく中で、他の取組みを理解し、情報提供ができるとう実感した。

Dさん：(皆が)同じ方向にむかい活動していることで、取組みについての相談等がしやすくなった。一人で頑張っていると、たいがい孤立するけれど、この活動はそうじゃない。

Eさん：実践について広い視野で対応できるようになった。(他を知る事によって)

Fさん：SCの目標は、あらゆる住民が健やかで安心した生活を送ること、SCの対象は、地域のすべての住民、あらゆる生活場面で、取組みの主体者は、行政・住民・地域組織・企業・団体etcで、この人たちや組織の連携を図っていくことだ。そして、アプローチの手段は、住民主体、地域の様々なアクターの協働、地域の実情に合わせた課題設定と取組み……なんだよねえ。これって、そのまんま「これからの地域福祉」、ソーシャル・キャピタルの理念と重なるんじゃない？……って事は、我々は同じゴールに向かって、SP/SCの評価システムを用いて取り組んでいるって事なんだよね。

IV. 考察

1. きっかけは、入りやすいところから

1989年に作成されたセーフコミュニティの取組みに関するガイドラインには、「既存の事業や活動などを組み合わせ、住民の強みを活用し住民の認識・行動および環

境を変えることで事故外傷のパターンを変えること⁴⁾が提言されている。B市でSPについて普及啓発し始めた当初、介入しやすい集団として、従来の保健活動の対象者やサービス提供機関に働きかけた。結果としては、その戦略は成功し、SP活動に巻き込むことができた。今後は個人的な動機付けを高める介入プログラムを検討すること、SP活動参加者を増やし、住民の認識・行動および環境に働きかけることが有効であると示唆された。

2. やりがいと手ごたえを得ることがプラスのサイクルをつくる

人との出会いをとおし、「連携や人とのつながりの重要性」を実感し、「新しい知識の取得」「まちづくりに関する視点の変化」「自分から行動してより良い環境をつくる」という内的変化が見られた。そこから、主体的に行動して環境に働きかけるという行動化への変容が確認できた。

SP/SC住民参加のきっかけと意識形成過程

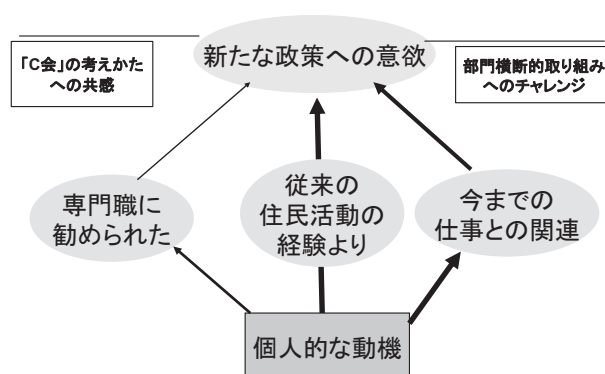


図1 住民参加のきっかけと目的意識形成過程

また、SCの実現を目指す活動に参加観察者として介入し、参加者のコミュニケーションおよび“やりがい”に注目した。ここで、“やりがい”とは、「するだけの値打ちがある」と認識されることである。類似語には「Challenging (挑戦的なものごと)」、「Rewarding (価値がある)」、「Worthwhile (時間・金・労力をかける価値がある。むだではない)」⁵⁾がある。

SC活動をとおり、会員は様々な知識を得ることで意識が高まり認識が変化し、行動化を促す「つながり」や関係者との「連携」が生まれ、行動変容が促されていた。これはSP/SC活動の波及効果と捉えることができよう。また、SP活動に取り組む意義はSCの認証の如何に係わらず大きいものであり、“やりがい”という形で報われるであろうと推察された。

3. SP/SC活動参加者の役割と課題

互いに関係しあうことを通じてSP/SC活動参加者が自覚した「役割」としては、「地域のコミュニティづくりをしていく」ために、活動の基盤となる「SCのシステムづくり」や「活動プログラムの目的を明確にし、それを評価するPDCAサイクルの意識化」などが挙げられた。

「PDCAサイクル」とは、Plan (計画)：従来の実績や将来の予測などをもとにして業務計画を作成する。Do (実施・実行)：計画に沿って業務を行う。Check (点検・評価)：業務の実施が計画に沿っているかどうかを確認する。Act (処置・改善)：実施が計画に沿っていない部分を調べて処置をする。この4段階を順次行い、一回りしたら最後のActを次のPDCAサイクルにつなげ、螺旋を描くように一周ごとにサイクルを向上させて、継続的な改善を図っていくものである。本研究では、P：調査による現状把握、D：住民への介入と支援から地域の

コミュニティづくりをしていく、C：従来事業とのすりあわせやスーパーバイズ機能、A：ビルド・アンド・スクラップがサイクルになっている。

SCのシステムづくりためには、「調査による現状把握」や「教育機関・民間との協働」「行政・在宅介護支援センター・作業所の協働」が不可欠で、行政には共に実践しながら、全体の「スーパーバイズ機能」を担うことが役割期待としてあげられていた。また、これらの根幹をにう地域住民に対する働きかけとして、活動の裾野を広げるための「住民への介入と支援」「人材育成」により、「個人レベルでの意識向上を図っていく」ことが示された。

黎明期の組織活動における参加者が認識した役割は、SP/SC活動の根幹をにう地域住民に対する働きかけとして、活動の裾野を広げるための「住民への介入と支援」や「人材育成」により、「個人レベルでの意識向上を図っていく」ことであった。

一方、SP/SC活動の課題として、まず挙げなければならないことは「SCの概念が住民に十分理解されていない」ため、「住民を巻き込み興味関心を引き出す」働きかけが必要であること。さらに、「世代・職場・地域におけるつながりの希薄化」が都市部のみならず、地方においても進行しているため、「連携の必要性はわかっているが、もともとつながりが少ない」ため、様々な相談機関・部署があっても「気軽に相談できる場がない」という認識が強固になってしまっていることも大きい。

また、外傷予防プログラムについては「当事者に問題意識がない」、「対象の年代にあわせた(自殺予防)プログラムの開発や介入の明確化」、「対象の実生活に則した経済的で具体的な働きかけ」、「調査からプログラム作成へ評価の見通しが立たない」等の課題意識があり、これらより、B市の外傷に関する統計結果が当事者である市民に

対象者のやりがいと手ごたえ

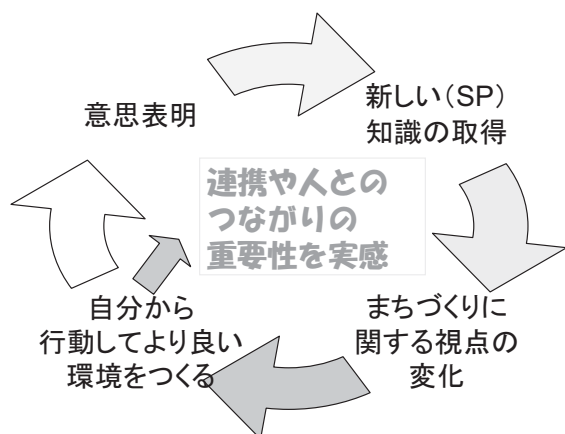


図2 対象者のやりがいと手ごたえ

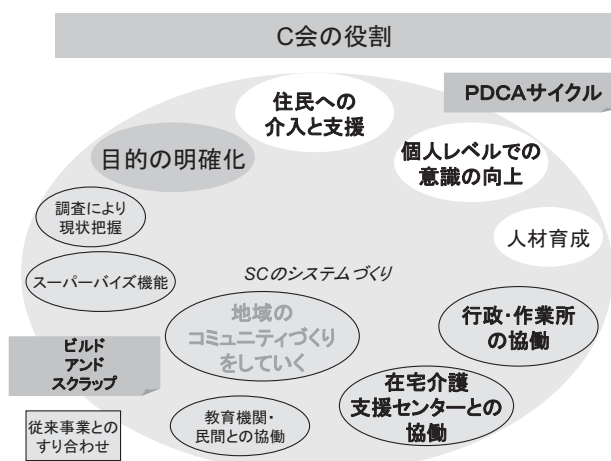


図3 T会の役割

十分周知されていないため、問題意識が形成されないのではないかと推察された。よって、行動変容には本人の主体的参加とそのための意識化が欠かせないことが示された。

4. 住民による自発的目的意識の形成

住民の転入・転出、就職等や、地方行政による宅地造成、地域のインフラへの投資のようなマクロな構造的な影響力によって人々の繋がりが形づくられると仮定するならば、「集団行動を組織化することや地域の見知らぬ他人を信用することは、地域が不安定だったり、貧困だったり、社会的に隔離されていたり、より良い将来への希望も展望も無いような見捨てられた状態では、きわめて難しいことである」⁶⁾ ため、マクロな構造的な介入を補うようなものとして、住民個々を単位とするミクロなネットワークの活性化が必要であり、C会はその役割を担っているといえよう。

このようなことから、地域住民の合意形成と参加が促進させるためには、集団に働きかけることが重要であり、「住民への介入と支援」および「人材育成」を継続的に行うことで、会員の認識を変化させ、行動化へ繋げることができることが期待できる。このような活動を積み上げて行くことにより関係者との「つながり」や「連携」が生まれ、参加者の中に目的意識を醸成できるであろうと分析した。

V. 本研究の限界

今回の研究方法は、症例対照研究の症例のみを扱ったケースと同じ意味合いを持つ。従って、主体的参加ができなかった人々のデータが得られていないことが弱点である。また、対象者が症例のなかから無作為に抽出できていない点は質的研究手法が抱える研究デザイン上の弱点である。

VI. まとめ

C会メンバーへの面接より、①地域住民活動の目的意識形成過程では、知識を得ることで認識が変化し、行動化を促す「つながり」や関係者との「連携」が生まれ、行動変容が促されていた。さらに、②地域住民の合意形成と参加が促進される条件は、介入しやすい集団に働きかけ、人材育成活動を積み上げることであった。また、地域の健康および安全に関する課題として、自殺が多いという

地域特性が抽出された。

SP/SCに取り組む利点は、従来の縦割り行政を横の連携で組み立てなおし、部門を越えた話し合いにより、ビルド・アンド・スクラップできる点である。このことは、社会保障制度の給付と負担をいかに適正にしていこうという改革の流れの中で公平かつ効率的な地方分権と行政政策を推進する一助となる。また、住民が横系になり、ワーキンググループによる各政策評価項目の抽出を行うことで、縦系である行政と協働し、SP/SCの効率的な推進に資することが期待できる。

引用文献

- 1) 反町吉秀, 奈須下淳. 日本におけるSafety promotion/Safe community活動の展開. 小児内科, 2007; 39 (7): 1024.
- 2) 内閣府男女共同参画局2003年配偶者等からの暴力に関する調査, 東京都: 独立行政法人国立印刷局, 2004; 6.
- 3) 佐藤郁哉. フィールドワーカー書を持って街へ出よう. 東京都: 新曜社, 1992; 115-120.
- 4) 白石陽子. WHO「セーフコミュニティ」モデルの普及に関する研究. 立命館大学政策科学学会「政策科学」, 2008; 15 (1): 31.
- 5) 小西 友七. ジーニアス和英辞典. 東京都: 大修館書店, 2007;
- 6) イチロー・カワチ, S.V. スプラマニアン, ダニエル・キム著. ソーシャル・キャピタルと健康. 東京都: 日本評論社, 2008; 37.

参考文献

- 7) 衛藤 隆. 子どもの事故防止から“Safe community”へ. 小児保健研究, 2005; 64 (2): , 170-175.
- 8) 衛藤 隆. Safety promotion の概念とその地域展開. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 2007; 46: 331-337.
- 9) 白石陽子. 「セーフコミュニティ前史」. 立命館大学政策科学学会「政策科学」, 2007; 14 (2): 103-113.
- 10) 反町吉秀, 渡邊直樹. セーフティプロモーションおよびセーフコミュニティとは何か?. ストレス科学, 2004; 19 (3): 119-124.
- 11) 反町吉秀, 白川太郎. 子どもを守る環境づくりとしてのセーフティプロモーション. 保健の科学, 2005; 47 (12): 866-872.
- 12) 岡澤昭子. 平成16年度地域保健総合推進事業「特徴的な健康被害に備えた保健所の危機管理機能強化」. 研究サブグループ代表 大西基喜. 市町村におけるセーフティプロモーション(SP)のモデル事業化研究報告書, 大阪府: 2005; 133-212.
- 13) 岡澤昭子. 平成17年度地域保健総合推進事業「特徴的な健康被害に備えた保健所の危機管理機能強化」. 研究サブグループ代表 大西基喜. 市町村におけるセーフティプロモーション(SP)のモデル事業化研究報告書, 大阪府: 2006.
- 14) 久保田芳則. 平成18年度地域保健総合推進事業「市町村におけるセーフティプロモーション(SP)のモデル事業化」研究報告書, 岐阜県: 2007.